

令和5年度 とやま新時代創造創造プロジェクト学習推進事業
実施報告書【学校課題実践校用】

学校番号	48
学校名	富山県立となみ総合支援学校

学校の現状と課題	本校は、知的障害と肢体不自由を教育の対象とする特別支援学校で、児童生徒一人一人の生活経験の拡大や自立と社会参加を目指した教育を推進している。これまで、児童生徒の生きる力を育むため主体的・対話的な学びにつながる授業づくりに取り組んでいるが、この授業づくりとともに、児童生徒自身が、学びの中での変容(「何ができるようになったか」)に気づき、個々の成長の過程を実感できるようにしていきたい。特に、日常生活動作や活動経験を増やすための身体の使い方、コロナ禍などの影響で低下が懸念される健康・体力の向上にICT機器の利活用も含め力を入れていきたい。そのための、児童生徒の実態や成長を捉える専門的な視点や児童生徒の個々の課題に応じた指導や支援を行うための専門的知識や技能を向上させていきたい。	
テーマ(特色)	児童生徒が主体的・対話的に学び、個々の成長を実感できる授業づくり ～運動・動作の拡大、健康・体力の向上を目指して～	
設定した「テーマ」の達成状況	対象児童生徒25名について、外部専門家である理学療法士や作業療法士と継続的に連携を図ったことにより、児童生徒の実態を視覚・運動・動作的な観点から捉え直すことができた。加えて、一人一人に応じた適切な指導目標の設定や支援を行うことができ、児童生徒が自己の成長を実感できる授業改善につなげることができた。また、外部専門家の助言を直接見聞する機会の設定、対象児童生徒の指導教員が支援のポイントを他教員に伝達する場の設定などにより、助言で得た指導を他児童生徒に生かすことができ、連携を取った教員は、自信を持って指導にあたることができるようになった。また、大学教官と連携を図ったことにより、子供の体の発達に即した効果的なトレーニングについて、学校だけでなく家庭でも楽しく取り組める運動プログラムについて、授業や余暇活動、また、家庭において取り入れることができ、児童生徒の健康や体力の維持・向上につながった。	
実施内容 (具体的に記入する)	下記のとおり、外部専門家と連携し助言を得て、指導や支援へ生かした。 ①理学療法士 松田 瞳氏(社会福祉法人くるみ)＜知的障害対象＞ ・立位・座位での姿勢保持、歩行時・書字時の力の入れ方・緩め方、走・跳など身体のバランス感覚を高める運動など ②作業療法士 渡邊純子氏＜知的障害対象＞ ・物をつかむ、つまむ、握るなどの手指の使い方と目の使い方など(ボタン留め、ちょう結び、雑巾絞り、箸の扱い、はさみの持ち方、書字につなげる指導) ③作業療法士 鷲尾智子氏(南砺市訪問看護ステーション)＜肢体不自由対象＞ ・座位・側臥位時の安定した姿勢の作り方や支援の仕方、タブレット端末を使う際の腕の支持の仕方や支援の仕方、喉や首、口周りへのアプローチの仕方など ④富山大学 准教授 澤 聡美氏＜知的障害および肢体不自由を対象(集団対応)＞ ・小学部1・2学年 体育の授業「ボール遊び」への指導助言:身に付けたい運動スキルの獲得へのアプローチの仕方 ・講話及び実技「健康・体力の向上を目指した運動プログラムについて」:家庭にある身近な道具や本校の用具を使った、限られたスペースでもできる楽しい運動遊び ⑤富山国際大学 子ども育成学部 講師 金子泰子氏＜知的障害および肢体不自由を対象(集団対応)＞ ・中学部1～3学年 保健体育の授業「サーキット運動」への指導助言:具体的なトレーニング法、筋肉の動きを視覚的に理解するための手立て、楽しく取り組むための活動の工夫、環境設定の大切さ ・講話及び実技「体力向上サーキットトレーニングをより充実したものにするために」:子どもの体の発達の順序、腸腰筋や大臀筋を鍛える意義と効果について	
取組による成果 (プロジェクト学習推進の観点から)	・理学療法士や作業療法士などの専門家の助言は、児童生徒の生活面や学習面での困難を視覚・運動・動作の観点から捉え直すことにつながり、大学教官からの助言は、体の発達段階や筋肉についての理解を踏まえて楽しく取り組むことのできる活動や環境の工夫につながり、児童生徒の実態把握の観点や指導方法の幅が広がった。 ・実践事例を教員間で共有することで、教員間で実態把握の共通の視点を持ち、対象児童生徒以外の児童生徒の実態把握や指導・支援に役立てることにつながった。特に、立位・座位での姿勢保持、歩行時・書字時の力の入れ方・緩め方、走・跳など身体のバランス感覚を高める運動、箸やはさみの使い方の支援、書字やシール貼り等に生かせる見る力を高めたり手指の巧緻性を高めたりする支援など理学療法や作業療法的なアプローチの視点は、多くの児童生徒に生かすことができた。 ・1回限りの指導ではなく、継続的な専門家による指導は、指導方法の定着と児童生徒の成長につながった。このことで、児童生徒自身が自己の課題と変容を実感でき、主体性や自己肯定感を高めることにもつながるとともに、指導者は、意欲的にかつ自信をもって指導にあたることができた。	
対象者(学年・人数など)	全学部児童生徒	
実施実績	4月	
	5月	
	6月	講師選定
	7月	対象者(グループ)の選定、実態把握、指導目標等の設定
	8月	
	9月	実践
	10月	外部専門家による助言(①、②、⑤)、実践
	11月	外部専門家による助言(①、②、③、④)、実践
	12月	外部専門家による助言(①、②、③、④、⑤)、実践
	1月	外部専門家による助言(①、②)、実践
	2月	外部専門家による助言(③)、実践
	3月	実践事例の紹介